

立ち読み版  
Turn Weaknesses into Strengths  
弱みを強みに  
転じた起業家たち

グローバル・ワン株式会社  
あらまき  
みみよみ事業部  
ゆかり  
荒牧友佳理さん



【写真】 田中 和弘

1985年、全盲の両親の元、三姉妹の長女として埼玉県に生まれる。大学卒業後、南アフリカで就職、その後、フィリピンに移り、マーケティング業務の経験を経て、合同会社ゆるりを設立。オウンドメディアの運営やコンサルティング事業を手がける傍ら、2020年5月に日本初の視覚障害者によるナレーション事務所「みみよみ」を開設。民間企業や官公庁向けに音声コンテンツを提供している。

「わたしの得意」を世の中に役立てる  
——視覚障害があるから提供できるナレーションの仕事

【取材・文】 荒井 ゆき なないるマネジメントオフィス代表／株式会社メディアリリーフ代表取締役／株式会社ライブリッツ・アンド・カンパニー取締役副社長／中小企業診断士

行政のリードも背景に、SDGsに向けた取り組みへの意識・関心は、大企業だけでなく、日本全国の中小企業にも広がってきている。世の中に財やサービスが溢れるなか、用を足せる相手なら誰でも良いというわけではなく、どんな人がどんな想いで携わるのかということを重視する風潮は、今後も一層増していくであろう。

視覚障害者専門のナレーション事務所「みみよみ」は2020年のコロナ禍直後に立ち上げると、各種メディアで一気に話題を呼び、急成長している。全盲の両親に育てられたという創業者の荒牧さんは、どのような思考の転換によって事業を軌道に乗せたのか、お話を伺った。



音と言葉を大切にする人に  
最適な仕事

荒井：「視覚障害者がナレーターに」ということで、テレビや新聞、Web媒体など多数のメディアに取り上げられていますね。

荒牧：私たちの活動を多くの方々にご提供いただける機会をいただけて、嬉しく思っています。でも、私自身の仕事としては、一般的なナレーター事務所を運営しているのと何も違いがないんです。現在、みみよみ専属のナレーターは6

名いますが、全員が自宅にある録音機材で収録し、編集した音声ファイルをお客様に納品しています。いわゆる“宅録”と呼ばれるスタイルです。ナレーターたちとはLINEでのやりとりがほとんどなので、彼らが視覚障害者だということを感じることなく仕事をしています。昨今ではコロナ禍も手伝って、一般のナレーター事務所も宅録の手法をとることが多くなっていますから、本当に何一つとして特別なことはないです。

荒井：テキストチャットで業務の依頼や連絡が完結するのですか。

荒牧：みなさん、スマートフォンもPCもすべて使いこなしています。スマートフォンにはアクセシビリティという機能があって、画面上のアプリ名やメニュー、文章などを読み上げてくれるんです。健常者では何を言っているのか全然わからないくらいのスピードで読み上げられてもすべて聴き取って、タップやスワイプをしながら操作します。私より早いくらい、チャチャッと扱って、LINEのやりとりも何の違和感もなく進んでいきます。目が見えないのは大きなハンディキャップですが、このように耳が良くて音声に敏感だということは、ナレーターとしては大きなアドバンテージです。

そして、もう一つ、視覚障害者は言葉の表現